

長い竹竿の先に釘をさして、荷物を遠くから引つけて奪って遁走する方法で、荷物は取られました。又、上海の集合地点でも、荷物点検等にして貴重品一点限りで、全部没収されました。

いよいよ日本に帰れるのだと非常によるこんで乗船して三日後に博多に上陸という所で、一人のコレラ患者が出、一週間船上生活となり、一変して、食事、洗濯、水にいたるまで、一切がチップ次第で、金がなければ、生活できなかつた。

博多の土を踏んだ時は、家族全員が疲れはて、動くこともできず、乳幼児もいることで、博多の旅館で二泊して、主人の故郷の婦恋村へと向かうことになりました。

駅に向かう途中八百屋さんの店先に二つだけの夏蜜柑を買い求めて乗りこんで途中食べ物があるだろうと思つて乗車したが当時は駅の売店もなければ、水もない、京都に着いたら、駅構内に水道があり其の水は今でも忘れない味だつた。そして二日間の旅は夏蜜柑二つで四人家族で生きられたことを想うと、人間の

強さは常識で考えられないものがある。

然し電車の中は満席で幼児をしつかり抱き続けたために食糧不足と又体力の限界で動けなくなり、そのまゝ寝こんでしまった。

あれから四十有余年今年も満州の避難する時に別れた子供達が肉親さがしに来日している。

中国の育ての親も歳をとり、亡くなった人もいる、生みの日本の親も老齡化し、だん／＼肉親との再会も難しくなっています。

もう十年も早かつたらとなげいています。

私達は全員無事に引揚げたので不幸中の幸いでした。

## 万里の長城よサラバ——張家口脱

### 出の記——

石川県 中山 隆

七月になると市内に日本軍の往来が目だつようにな

り、北支方面から軍用列車が物資を満載して到着し、郊外の広場に物資を格納した大きなテントが幾つもできた。

公共体育場の背後にある東太平山麓では連日横穴を掘る発破の轟音が響いた。万一の場合、張家口市内の在留邦人、二万数千人の生命を守る、食糧を貯蔵するためのものであった。誰言うもなく各家庭では不用品の整理を始めていた。

私は、家庭で使役していた夫役（下男）と阿媽（下女）に私達が引揚げた後は凡て二人に進上すると申し替えていた。二人の誠実、勤勉な奉仕に、せめてもの私達の感謝の心であった。日増しに慌しくなり、妻は連日の緊張と不安、それに生後間もない赤子の世話で疲れ果て、母乳の出も減った。紅葉のような手ででない乳房をまさぐる嬰兒を眺めて幾度涙をかくしたことであろうか。

八月九日、ソ連参戦の報が伝わった。しかし嵐の前の静寂というべきか、邦人の間には心配した程周章狼狽の気配もない。私は日本の敗戦は決定的なものにな

つたと観念した。

八月十五日正午、終戦の詔勅の放送があり、妻とラジオの前に正座して耳をすました。無条件降伏である。覚悟はできていたとはいえ、不知不識のうちに無念の涙が頬をつたった。傍の妻も生後三か月の坊やをひしと抱きしめ大粒の涙をポトポトとおとした。

八月二十日、午後六時頃、夕飯の膳に向かおうとしていた時、騎馬の伝令が飛んできた。

第一国民学校に集合せよ、というものだった。直ちに妻の通い馴れた学校へ急行すると、そのまま張家口駅へ行って下さい。と先刻の伝令が飛んできた。

興安大街の並木通りも、これで見納めと思う。駅には既に到着していた家族が溢れていた。四十五両編成の引揚列車が用意されており、無蓋の石炭運搬車両に次々と乗りこんだ。中には察南病院に入院中の重傷患者や産後間もない婦人方は担架で列車に運びこまれた。夜十時すぎ列車は出発した。これで二度と張家口へ来ないだろう。全くみじめなわが姿。住みなれし町よ、サラバ、以下は妻の鉛筆での走り書き日記を原文

のまま記載する。

### 妻の日記

八月二十一日、先行の列車が二回目の襲撃をうける。私達の列車が最後になった。部隊のいない不安な夜がふけてゆく。各車毎に列車の下の検閲がある。邦人同志の合言葉は「忠」と「孝」に決まる。列車が動こうとするとホースが破られている。信号が変わらない。このままここで死ぬのかしら、涙がでてくる。沈黙が続く。八達嶺よ、万里の長城よ、サラバ。山の上から、中腹から日本の兵隊さんが手を振ってください。私達を守って下さるのだ。嬉し涙があふれでてる。トンネルは石炭車なのでタオルを口にあてても息苦しい。煙にむせる。坊やが泣く。夜になると雨にびしょ濡れ、昼は太陽にてらされ、汚れて、濡れたおむつもそのままかわかし、着物も着替えがなく、すずをかぶった顔も洗わず、食事もとれず、お乳も細くなってきた。坊やは泣く。病気にさせてはならじと、日が照れば陰にし、雨が降れば体で掩い。

八月二十二日、夕方、駅と駅との間の小川の近くに

しばらく列車がとまる。主人が車内の人から借りた軍隊の飯盒でご飯を炊いて下さる。そういえば二十日の夕食も食べないままの引き揚げだった。坊やのためにお乳のできるように神様にお願した。お乳のない乳首に武者ぶりついては泣く坊や、ごめんなさいね、ごめんなさいねと何度も何度も心の中であやまつては一緒に泣いた。昨日も赤ちゃんが二人も亡くなったと聞いた。

八月二十三日、進行中の列車の中へ軍隊から乾麺ぼうという食物の入った麻袋が投げ込まれ、お互に分けあって空腹を凌いだ。夜は土砂降りの雨、みんなで毛布をひろげて防いでみたが、ずぶ濡れだ。緊張のせいにか風邪を引かないのが不思議である。

八月二十五日、午後夕闇、豪雨の中神佛のご加護のお蔭で無事に天津駅に到着、直ちにトラックで大和国民学校に運ばれた。夜おそくまでかかって天津在留邦人のお世話で温かい高粱のご飯をいただく、久しぶりに教室の中で手と足を伸ばして寝ることができた。

八月二十六日、租界内の淡路国民学校に移される。

心なしか坊やも元気がでてきたようだ。主人も元氣、団体の総務として忙しい。その後、米軍の進駐により、貨物廠に移され、次に機械工場に移され、最後に天津公会堂に落ち着いた。

十月二十一日、天津公会堂から芙蓉校に移って荷物検査にあい、その夜は天津駅集合。

十月二十二日、塘沽港着、埠頭で米軍による検閲をうけたが主人も一緒なので心丈夫なり、午後、江の島丸という貨物船に乗船、私達は引揚第一号の船である。

十月二十三日、午後一時出航する。感無量である。

十月二十七日、博多港に入港しはじめて心から安堵する。

十月二十八日、県別に下船し、主人は石川県の責任者なれば大忙、内地の土を踏みしめ、嬉しさの余り、どっと涙が流れた。